

# 生徒の理解を深める 一歩進んだ文法・語法情報



柏野健次

『ジーニアス総合英語』の1つの目標は、従来の学習参考書ではあまり取り上げられていないが一歩進んだ重要な文法・語法情報を、英語学の知見に基づいて幅広く取り入れ、それを平易な言葉で解説することであった。実際に本書をご覧いただければ、それが随所にちりばめられていることが分かってもらえると思うが、以下では紙幅の関係でその具体例を7項目だけ紹介する。

## ◆現在時制の hear と forget

本書の「第3章 時制」p. 86と「第4章 完了形」p. 97に次のような hear や forget が現在時制で用いられた例が載っている。

- (1) I hear John has a job at the hotel. (ジョンはホテルで働いているんだってね)
- (2) “What was the title of the movie you saw yesterday?” “I forget.” (「昨日君の見た映画のタイトルは何だった?」「忘れちゃった。」)

(2)の「忘れちゃった」なら現在完了や過去時制を使って表しそうだが、現在時制が使われていることに疑問を持つ生徒も多いことだろう。

これらの現在時制は I've heard...や I've forgotten. よりもさらに現在の状態を強調する働きをし、それぞれ I understand (～という情報を持っている) や I don't remember (忘れて思い出せない) とほぼ同じ意味を表している。この hear と forget は、特に話しことばでよく用いられる。

## ◆ may, might, could と can

「第5章 助動詞」p. 120に may, might, could

が現在や未来に関して「～かもしれない」「(たぶん)～だろう」の意味を表す例が見られる。

- (3) Bill may [might, could] be sick.
- (4) She may [might, could] come here soon.

ここでは3つの助動詞は「具体的な可能性」(出来事が特定の1回だけ起こる可能性)を表しているが、こういう場合には can は使えない。can が使えるのは、Anybody can make mistakes. (誰でも間違いを犯すことはある)のように「一般的な可能性」(出来事が不定期に何回か起こる可能性)を表す場合である。ただ、これは肯定文に限って言えることで、疑問文や否定文では、Can it be true? (それは本当なのか) や It can't be true. (それは本当のはずがない)のように、can は「具体的な可能性」を表すことができる。

## ◆ must not と don't have to の表す意味

「第5章 助動詞」p. 125に must not と don't have to の意味の違いについて次のような説明がある。

例えば、You must not do that. では not は動詞 (do) にかかり、「あなたがそれをしないことが要求されている」(=It is necessary for you not to do that.) ことから「それをしてはいけない」という意味になる。一方、You don't have to do that. では not は have to にかかり、「あなたはそれをすることは要求されていない」(=It is not necessary for you to do that.) ことから「それをする必要がない」という意味になる。

ちなみに、他の助動詞、例えば may は「可能性・推量」の意では not は動詞を否定し、「許可」

の意では not は助動詞を否定する。

(5) He may not be serious (彼は真剣でないかもしれない) [=It is possible that he is not serious.]

(6) You may not touch my belongings. (私の持ち物に触ってはいけない) [=You are not allowed to touch my belongings.]

must not と don't have to の意味が違うことはどの文法参考書にも載っているが、なぜこのような意味の違いが生じるのかについて書かれているものはあまりないようである。

#### ◆分詞構文が使えない場合

「第9章 分詞」p. 250に「彼は目を閉じて座っていた」を分詞構文を使って、×He was sitting, closing his eyes. とはなぜ言えないかの説明がある。

これが不可なのは、close his eyes は瞬時に目を閉じる動作を表すので、現在分詞の closing にすると反復動作を表し、He was sitting, closing his eyes. は「彼は何度も目を閉じながら座っていた」という意味になってしまうからである。ここでは、〈with+目的語+分詞〉を用いて He was sitting with his eyes closed. とする必要がある。

同じように、「彼は腕を組んだままそこに1人で立っていた」は fold は瞬間的な動作を表すので、×He was standing there, folding his arms. ではなく、He was standing there with his arms folded. が正しい。

#### ◆〈as ... as〉構文で使われる形容詞の意味

「第10章 比較」p. 261に〈as ... as〉構文で用いられる old/tall などの形容詞の意味について言及がある。ふつう、これらの形容詞は「(年齢が) …歳の」「(身長が) …の」という中立的な意味を表すので、(7)ではトムとジェリーは5歳でも80歳でもいいし、150センチでも180センチでもよい。

(7) Tom is as old [tall] as Jerry.

ただし、文脈上、「年を取っている」「背が高い」という前提があれば文字通りの意味を表すことになる。英文法の指導では、このことについてあまり強調されていないように思われる。

(8) Tom is old. He is as old as your grandfather.

(9) Mary is tall. She is as tall as her father.

#### ◆配分単数

「第13章 名詞」p. 372に次例があり、smartphone は単数でも複数でもよいという解説がある。

(10) All the students have their own smartphone(s). (学生はみんなスマートフォンを1台ずつ持っている)

ここでの単数形の smartphone は配分単数と呼ばれるもので、「それぞれの学生に1台ずつ」という意味を表している。スマートフォンは常識的に1人1台であるから、単数にすると考えがちだが、むしろ複数形がふつうというのは意外に思う人もいるかもしれない。次の場合も同様。

(11) They nodded their head(s). (彼らは一様に了承してうなずいた)

#### ◆接触を表す動詞の取る構文

「第14章 冠詞」p. 381には接触を表す動詞は、① She hit me on the head. のような構文を取るだけでなく、② She hit my head. という言い方も可能という記述がある。そして、①は「なぐられた人」に、②は「なぐられた部位」に焦点を当てた表現という説明をしている。

さらに詳しく言えば、一般に、①は主観的な表現で、目的語の人に対する何らかの感情を交えた表現であるのに対して②は客観的な表現ということになる。本書に挙げられている She patted Bob affectionately on the head. (彼女はボブの頭をやさしくなでた) の例もこのような観点から眺めるとさらに理解が深まることだろう。

(かしの けんじ・大阪樟蔭女子大学名誉教授)